

〔新刊紹介〕

山本博文著

『江戸お留守居役の日記』

黒 瀧 十二郎

諸藩の留守居は、江戸藩邸にあって幕府と自藩との間の連絡や交渉にあたり、他藩の動向などを探ることを管掌した。いわゆる大名留守居といわれるものである。

大名留守居については、服藤弘司氏の法制史的立場からの『大名留守居の研究』（創文社 昭和五十九年）が第一にあげられるであろう。

これに対し、『江戸お留守居役の日記』は研究書ではないが、著者のこれまでの優れた研究成果を背景にして一般読者を対象に書き下されたもので、萩藩の江戸留守居役福岡彦右衛門の日記「公儀所日乗」の分析によって、寛永承応（一六二四―五四）の留守居役の活動の実態と江戸藩邸に於ける生活の様子を明らかにしたものである。尚、本書は可能な限り振り仮名が付され、出典・引用文献は（一）に記し、難解な歴史用語には（一）の中に説明を加え、一般読者が比較的抵抗がなく読めるよう配慮されている。

本書の構成は左のようになっている。

プロローグ お留守居役の登場

第一 お留守居役と幕閣・旗本

第二 支藩との対立

第三 萩藩の江戸屋敷

第四 他藩との交渉

第五 町人と江戸藩邸

第六 御家のために

第七 二つの代替わり

エピローグ 彦右衛門の引退

私なりに印象に残ったところをいくつか紹介すると、第一については、留守居役は自藩と幕府の間に立つてさまざまな交渉をする有能な外交官の役割を担っていることが見事に描かれている。

第四では隣接の他藩とのトラブルや、走者についての他藩との交渉など、留守居役が窓口となつて解決につとめている姿が見られる。

第五では、その中に強盗をやつた町人の共犯者として萩藩士が嫌疑をかけられ、江戸町奉行に逮捕された事件が記されている。萩藩士は取調べを受け、申渡しでは無罪となつた。その間、彦右衛門は町奉行と連絡しあい、これまでの経験にものをいわせて、藩士を無事藩邸に引き取り、罪人と起居を共にするような屈辱から逃れるようにしてやつた。彼は問題が後に生じないよう、藩士を守るための留守居役として適確な処置をしたのである。

第六では「東大寺領没収の攻防」を取りあげてみたい。萩藩は藩財政の窮乏から藩内の東大寺領を没収し、代償として米百石ずつ大坂で支払うことにした。その後東大寺は没収された土地を取り返そうと幕府に嘆願したので、彦右衛門は幕府と東大寺の間に立つてねばり強く交渉し、毎年現米三百五十石、借銀返却ののち藩内一律に知行を返却するとき寺

領も返す、という線で折り合い、萩藩の利益になるよう行動して事態を収拾したのである。

留守居役については服藤氏が前掲書に於いて、「ただ確実にいい得ることは、大名留守居制が藩政上に与えた影響は、マイナスであつたという点である」と述べていることに對し、山本氏は本書の第六に於いて「のちの留守居役の墮落を見通した、氏の多面的な検討の成果は尊重されなければならぬが、少なくとも大名留守居役は、彦右衛門のように幕府にしたがう姿勢を見せながら、あくまで藩の利益を最大限に実現することを追求していたことを見落すわけにはいかないであろう」と結んでいる。この事は、山本氏が彦右衛門の日記の分析によつて、萩藩の留守居役について究明した根幹部分であらう。

本書は一般書の体裁をとつてはいるが、高い研究内容をもつたものである。この山本氏の研究成果を踏まえて、全国的個別藩の留守居役の研究が一層推進される必要があらう。

津軽藩に限つていえば、服藤氏の前掲書に笠原八郎兵衛が紹介されている程度であり、中国地方の萩藩に對し、東北地方北部に位置する津軽藩の留守居役についての研究成果が渴望されるところである。

最後に本書の紹介にあたり、必ずしも適切でなかつた点はお詫びしたい。なお、本書は本年度日本エッセイストクラブ賞を受賞した。著者とともに受賞をよろこびたい。

(読売新聞社 一九九一年七月刊 二九四頁 一、八〇〇円)

(青森県立弘前中央高等学校教諭)